國學院大學学術情報リポジトリ

口承三国志の研究 曹操伝説を例として

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立石, 展大, Tateishi, Nobuatsu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000223

口承三国志の研究　曹操伝説を例として

立石展大

はじめに

本稿では、中国各地で語られている口承（口伝え）の三国志について、曹操を主人公とする伝説を取り上げて分析する。『三国志演義』や古典劇を始めとして、奸雄のイメージが強い曹操だが、口承世界において、曹操を主人公とする伝説を見ていくと、曹操が知略に富んだ人物として語られ、肯定的に受け止められている姿が浮かび上がる。この傾向は、例えば、曹操の故郷がある安徽省において強い。そこで、曹操に関わる伝説から、民衆が曹操を多面的に捉えてきたことを明らかにしていく。また、他の伝説と同様、これを伝える民衆の生活文化が曹操の伝説にも反映しているので、この点についても指摘していく。

一　曹操伝説研究の現状

本稿において「伝説」という用語を使用するが、これは口承文芸の一分野である民間説話を研究する上での学術用語として用いる。日本の民間説話は、口伝えの伝説・昔話・世間話であ

り、場合によっては神話も含む。その伝説とは「具体的な事物に直接結びついて、真実と信じられてきた伝え」[1]である。

ちなみに、民間説話は、中国では、「民間故事」と訳すことができ、日本でいうところの神話・伝説・昔話はこの範疇に入る。これらの研究を行う場合、現地での聞き取り調査によって記録した話を分析するほか、すでに報告された資料集に記載されている話を分析することになる。中国では、この三十年ほどの間、全国各地における組織的な調査が行われ、資料集は充実した。中国大陸において国家の関係機関が主導し、日本の「市」レベルでの採集作業が行われた。一九八四年に開始され一九九〇年までに中国全土で一八四万余話が収集されている。これにしたがい、省・自治区・直轄市ごとの『中国民間故事集成』が刊行された。このシリーズは、現在完結している。その後、「市」レベルでまとめられた『中国民間故事全書』シリーズが刊行され始めた。こちらは、現在も逐次刊行されている。これらのシリーズは、昔話を研究する際の信頼できる資料となっており、各話の最後には、その話の語り手、採話者、採話地と採話した年の情報が挙げられている。

他に、中国全省や全民族の民間説話を出版しているシリーズとしては、陳慶浩・王秋桂主編『中国民間故事全集』全四〇巻（一九八九年　遠流出版社）や中華民族故事大系編委会編『中華民族故事大系』全一六巻（一九九五年　上海文芸出版社）がある。

このように、中国の民間説話について調べる際、これらの資料集を用いて話を収集することが可能となったが、索引が完備されているわけではないので、話の収集に際しては、虱潰しに見ていくことが基本となる。

本稿で取り扱う曹操伝説については、湖北省群衆芸術館編（江雲・韓致中主編）『三国外伝』（一九八六年　上海文芸出版社）に多く集められている。ここに載せられている話は、蜀関係の人物伝が一四四話、魏が四四話、呉が五一話で、その他人物伝が一二話である。総頁数は五五四頁にわたる大部の書籍である。その序によれば、この資料集は、江雲・韓致中の両氏を中心として、十数省・五〇余県を訪れて、フィールドワークをした成果である。日本側では、この資料集の抄訳が、立間祥介と岡崎由美の両氏によって『三国志外伝』として、一九九〇年に徳間出版から刊行されている。ただし、これは全三三話の抄訳の内、一八話が蜀の部で、魏の部には七話を訳しているのみである。しかも、曹操に関する話は、次の表に挙げた13・18・36・38の四話のみである。そのうち、13を除く三話は、いずれ

も曹操を、度量が狭く疑り深い人物や、奸智に富んだ人物などの否定的評価で語っている。

しかし、後述するが、曹操を主人公とした全四〇話のうち、曹操を機知に富んで先見の明がある英雄として、肯定的評価で語る話が多い。その数は二五話に上る。否定的評価が七話であることをみると、肯定的評価が圧倒していることが分かる。また、前述したように、『三国外伝』の魏の部の総話数は四四話なので、ほとんどが曹操関係の伝説である。

ちなみに、三国志の民間説話が邦訳された書籍として、他には殷占堂編著『三国志　中国伝説のなかの英傑』（一九九九年岩崎美術社）があるが、こちらは各話の原典が明記されず、訳についても部分訳や意訳が目立つため、読み物としては面白いが、研究資料としては不適である。

なお、先行研究については、日本では、管見のかぎり見当たらない。中国側では『三国外伝』の冒頭部分で江雲と韓致中の両氏の連名での解説が挙げられる。ここでは、三国志の民間説話が、『三国志演義』成立にどのように関わっていたか、そして『三国志演義』が民間説話にどのように影響を与えたかを中心に解説され、また三国志の民間説話の独自性について述べられている。ただし、本稿で扱うような生活文化の反映については言及されていない。

二　『三国外伝』の曹操伝説概観

さて、それでは『三国外伝』にまとめられた、曹操に関わる四〇話の概要を見ていきたい。表に整理したが、順番は『三国外伝』どおりであり、これで見ると、誕生から死去まで、およその時系列で並べられていることが分かる。それぞれ、和訳題名と概要、伝承地を挙げた。そして、曹操に対して肯定的評価の場合は「○」、否定的評価の場合は「×」をつけ、どちらでもない場合は無印としている。

『三国外伝』における曹操伝説一覧表

	題名	概要	伝承地	評価
1	曹操はなぜ阿瞞と呼ばれたか	曹操の村には、奇妙な風習があって、閻魔の注意を引かないように、子どもに名前をつけないか、「犬」などの名前をつけていた。曹操は、親の養子元の夏侯家に連れ戻されないよう、瞞（隠す）とつけられた。	安徽省亳県	

2	阿瞞が計略を試す	分家をして、兄から井戸口を三分の一しか分けてもらえず、水を汲めない弟がいた。この弟のために、阿瞞が計を授ける。弟は、三分の一の所から糞をする振りをする。驚いた兄は、後悔して、二人で井戸を使うことにした。	陝西省 勉県	○
3	八角台	挙兵をする曹操が、仲間に対して、八角台を誓えに使い、連携することの大切さを説く。またこの時、誓いの血の杯を交わし、その際に飛んだ血が周囲の大根を赤く染めて、赤大根となり、この地の名産となった。	安徽省 亳県	○
4	高炉集の来歴	曹操が挙兵の準備のため、武器の用意を企図する。そこで渦河の河辺に、鍛冶屋を作り、裏で武器を造らせた。すぐに逃げられるように、職人が立って仕事をして、炉も高い場所に造られたので、高炉集と後に呼ばれた。	安徽省 亳県	○
5	曹操が袁紹をからかう	（全訳を後掲）	不詳	○
6	蹇叔を棒打ちにする	京城の北部尉となった曹操が、夜間に騒動を禁じる「宵禁令」を出す。宦官蹇碩の叔父にあたる蹇叔が違反したので、法に従って棒打ちにした。	不詳	○

7	呂伯奢を誤って殺す	董卓から逃げて、陳宮と共に故郷へ戻る途中、呂伯奢の家に泊まる。夜、家の者がヤギを殺してもてなす準備をしていると、それを自分を殺すことと勘違いした曹操が、一家を皆殺しにする。逃走中に会った呂伯奢も斬り捨て、その時の血が周囲の草を赤く染め、この地の草は今も赤い。	河南省 中牟	×
8	呂伯奢は殺すべき	逃げる曹操と陳宮を泊めた呂伯奢は、そのことを役所に報告すべく、酒を買う口実で出かける。呂伯奢の帰りが遅い上、食べきれないくらい大きなブタを家人が殺しているので、県の追っ手が来ることを曹操は見抜く。陳宮の制止を聞かず、家人を殺し、逃げる途中に会った呂伯奢も殺す。陳宮は曹操と絶交して去る。その後、追っ手が来るも曹操は誤解されたままとなる。	河南省 信陽	○
9	攔馬墻	曹操が、貧しい許褚の母親の薬代を立て替える。許褚を召し抱えると、許褚は、馬の調教をする。ある時、暴れ馬が許褚を乗せ、あわや馬場から河へ飛び込もうとする。そこで、馬を遮る壁を造った。	安徽省 亳県	○
10	石人坑	曹操を狙いに来た二人の刺客が、亳県の南の窪地で石像になる。	安徽省 亳県	○

11	冶渓と爐橋	曹操に武器製造を命じられた曹丕が、河原に職人を集め、武器を造らせたので、その河を冶渓といった。また、武器を運び出すため、鉄屑を混ぜた丈夫な橋を曹丕が造り、これは爐橋と呼ばれた。	安徽省定遠	
12	四眼井	洛陽に、水を汲む口が四つに分かれている井戸がある。軍民が水を争って諍いを起こしたため、井戸の口に四つの穴が開いた石板を置き、軍民がそれぞれ二つ使うこととなり、仲直りした。そのため、甘い水が汲める井戸口がある。また、諍いを起こすなどの経緯があって、他の三つの井戸口からは、酸味、苦み、辛みを感じる水が汲める。	河南省洛陽	○
13	曹操が、賢者を求める	中原に進軍する曹操は、中原にいる賢者を泰山の高僧に尋ねる。高僧は、錦の袋を渡し、曹操を名指しで罵る者が現れたら開けろという。許昌に進軍の後、荀彧が曹操を名指しで罵る張り紙をする。曹操が袋を開くと、謎かけの紙があり、謎を解くと荀彧が賢者であることを知る。荀彧を三度訪ねて迎え、進言に従って、求賢令を出す。	河南省許昌	○
14	議題村	洛陽から許昌へ進軍して、部隊が鄢陵県馬攔鎮に差し掛かった際、将軍たちと糧食の相談をしようとした。しかし、ふさわしい場所がないので、兵士の軍鞄にその村の蓮花土を入れさせた。そして、議題村に着くと、平坦な地に蓮花土を積ませ高台を築かせた。その時、蛙が鳴いて煩いため、曹操が黙れと言うと、蛙は村からいなくなった。蚊も煩いため、去れというと、いなくなった。糧食の解決がつかずにいると、ある夜、太白金星の化身が現れ、その助言に従い屯田制を始めた。	河南省鄢陵県	○
15	三柏一孔橋	董承が曹操を殺すため、勅命として、許昌の東門外に一日の内に三百一のアーチを持つ橋を架けろと命ずる。そこで、曹操は三本の柏の木を橋のたもとに植えて、一つのアーチを持つ橋を架けた。これで、三百（柏）一のアーチの橋とした。	河南省許昌	○
16	藏兵洞	許昌に曹操が造らせた四五里の地下道がある。入口は許昌の北門内にあり、出口は旧城の南門外にある。官渡の戦いの時、袁紹の密偵が許昌の陣容を偵察に来た際に、この地下道を使った。兵を循環させ、次々と兵士が許昌に入るように見せかけ、袁紹を騙した。	河南省許昌	○
17	喪服を着て袁紹を弔う	官渡の戦いの後、袁紹の本拠地であった冀州の民衆は、曹操に反発していた。そこで、曹操は袁紹のために喪に服し、武	河南省中牟	○

18	曹操が三度諸葛亮を招く	力を使わず民心を掌握した。	湖北省襄樊	×
19	曹操顔	程昱の推薦で曹操は、諸葛亮を招くべく、程昱、曹洪と出発する。最初に訪ねた曹洪は会えず、次の程昱は出仕を断られる。最後に曹操が訪ねるが、諸葛亮が笑って断るのを、笑い者にされたと思い、立ち去った。 禰衡が曹操を諸将の面前で罵るが、曹操は笑っていた。そして、劉表の策士に推薦して、劉表の手で殺させようとした。しかし、劉表もそれを見破り、黄祖に禰衡を推薦する。結局、黄祖によって、禰衡は殺される。俗に「曹操が暴れるのは怖くないが、笑うのが怖い」と言う。また、劇でも曹操の両頬に三つの小刀を描き、笑顔かどうか分からなくする。「両面三刀（裏表がある）」はここから来ている。	不詳	×
20	刺角芽はなぜ畑に生えるのか	曹操は、劉備を新野で追撃するが、兵士たちの進軍が遅い。理由を聞くと、道に生えている刺角芽を誤って踏むと、血を流すためという。曹操は、植物の命さえ惜しんで慈悲の心を見せようと、刺角芽を刈り取らせず、畑に生えるように命じた。すると、刺角芽は畑に移動する。更に、農民に刈り取られないように、根を深くはれと命じる。そのため、犂でも除くことが難しくなり、人々は曹操を憎んでいる。	湖北省襄陽	×
21	曹操と王子墩	曹操の軍は規律が厳しく、民衆に支持された。潜山、懐寧、桐城の交わる村に進軍した際、夫人の陣痛が始まった。兵士に土を盛らせて台を造らせ、小屋がけして夫人を住まわせると、曹丕が誕生した。村民も祝いの品を争って贈った。特に、細麺は夫人に喜ばれ、懐寧の「貢面」として名産となった。曹操も村人の厚情を喜び、この村を「育児村」と名付け、曹丕が生まれた場所を「王子墩」「天城」と名付けた。	安徽省潜山	○
22	店埠街	合肥の地勢が低いため、曹操は張遼に命じて、逍遥津に高台を、途中に貯水池を造らせた。そして自ら筆を執り「墊歩（高くして歩む）」と記し、石工に石碑するようにさせた。その後、工事が進まないので、曹植が派遣された。すると、現場は人が多くても店がなく、生活が苦しかった。そして、曹植が石工の所に行くと、周囲にいる者たちは文盲で「墊歩」を「店舗」と聞き違えて喜んで、曹操に感謝している。そこで、曹植は曹操の筆跡をまねて「店埠」と書いて、石碑を造	安徽省合肥	○

	23	雁門口	らせた。その後、曹操も曹植の行動を褒め、店も増えて、賑やかになった。	
	24	軍船を焼き捨てる	曹操が軍船を建造し、焼き捨てた洞庭湖の砂州は、「曹洲」「曹田洲」と呼ばれている。ここで建造した船を赤壁へ運んだが、敗北した。曹操は、洞庭湖へ人をやって、砂州を焼き払い、船を敵に渡さなかった。周瑜と諸葛亮は勝ったが、大勝利とはいえず、三国鼎立となった。	（全訳を後掲）
	25	鶏鳴城	赤壁で敗れた曹操は、漢川県二河鎮の近くまで逃げ、城を築き、兵を休ませた。しかし、翌日の夕刻、劉備の軍勢が城を囲み、砦を築き夜明けを待った。そこで、曹操は、近くの村から多くの鶏を集めた。劉備軍が寝入ると、鶏が鳴いたので、戦の準備をすると、まだ宵の口だった。再び寝ると、また鶏が鳴くが、まだ、二更だった。真夜中過ぎに曹操は、三度鶏を鳴かせたが、劉備軍は寝入っていたので、曹操軍はこっそりと逃げた。そして、その城は鶏鳴城と呼ばれた。	
	26	習文村	臨漳の西南十里の村に、曹操の習文館があったので、この村は習文村と呼ばれた。銅雀台に住んでいたある年、非常に忙し	

	湖南省 岳陽	不詳	○	
	湖北省 漢川		○	
	河北省 臨漳		○	

	27	鱗の頭	かったので、周囲が習文館を建てて休ませた。鳥もさえずりを遠慮して、今でもここは静かな地である。曹操は銅雀台にいた時、一角龍を飼っていた。龍は、銅雀台を守り、毎年始めに、元宝を吐き出した。曹操は、それを付近の貧しい人々に渡させた。曹操の死後、ある富豪がその宝を手に入れるため、斧で龍の口を切りつけた。富豪は、龍ににらまれて死んだ。貧しい人々に手当をされた龍は、後の時代に死んで石になり、銅雀台の遺跡にいる。切り落とされた口と、その時の宝は今もあるという。	
	28	鉄くず	銅雀台の南三〇丈に金鳳台があって、そこで兵の修練をした。そこには、四方八方へ兵を動かす地下道の入口もあった。金鳳台の前には、鍛冶工房があり、曹操は、よく訪れて技術を学び、自分でも打った。ある北方遠征の時、自分を救った息子のために曹操は、自ら刀を打った。その時、彼の手から出た鉄屑の山には誰も手を触れなかった。後の時代、漳河の流れが変わり、銅雀台も、その北の氷井台も流されたが、金鳳台の基礎と鉄屑の山は残った。附近の農民は、この鉄屑を馬鍬の上に置いて、重りにして耕した。	

	河北省 臨漳		○	
	河北省 臨漳		○	

	29		不注意で元の場所に返し忘れても、翌日には自分で戻っていた。
	曹操が子どもに服する		曹操が、金牛山の麓、金牛河の対岸に城を築き始めた。それを山上で見ていた牛飼い童が笑った。それを見た曹操が理由を聞くと、金牛山で戦争ごっこをすると、いつも山上の者が、麓の者を倒すという。童の失礼な態度に、周囲の者が怒ったが、曹操は童の話には道理があるとして、南四〇里に城を築いた。その際、各兵士の兜に土を入れて運ばせ、城外に山を造らせた。城の見張りを助けた小山は、帽頭墩（帽子山）と呼ばれた。
	安徽省 盧江		○

	30		ある冬、曹操の水軍が濡須口まで来て、巣湖に入ろうとしたが、凍結していて入れなかった。曹操は、兵士に水路を掘らせて、その陣中見舞いに出た。すると、兵士たちが対聯の上句をふざけて言っている。「兵士の船を兵士が動かして兵士が氷を割る（兵船兵開兵破氷）」しかし、下句がうまくつけられない。曹操がつけようとしてもうまくできず、諦めかけた時、尼寺の情景が眼に入った。そこで「尼の靴を尼が持ってきて尼が泥を落としている（尼靴尼携尼洗泥）」とつけ、兵士たちは感服した。
	濡須口の対聯		
	安徽省 盧江		○

	31		曹操が袁紹討伐後、すぐに南征を行った際、九嶺山の毛家段六屋に来た時、私塾の教師が春聯を詠んだ。「征く時は、刀も矛も煌めいて将兵も多く、何と盛んなことか。帰る時は、死屍累々として身の毛もよだつうめき声を立て、何と悲しいことか」それを聞きとがめた曹操が訳を聞くと、教師は討伐後の連戦の不利を説く。それを聞いて、曹操は南征を止めた。その故事を記念して、後世の者が唱歌亭をその地に建てた。
	唱歌亭		
	湖北省 通城		○

	32		曹操は張魯を下すべく、褒斜古道の石門に来た。漢中盆地の素晴らしさに、詩を吟じたくなった。曹操は川の丸石に水があたる光景から「袞雪」と丸石に刻した。ある者が「袞」は本来「滾」で「三水」が足りないことを指摘した。しかし、曹操は周囲の手前間違えを認めず、丸石の周囲の川を指して、「水が既にあるので、三水は蛇足」と言い逃れ、周囲の者は、それに感服した。
	曹操が字を間違える		
	陝西省 勉県		

	33		曹操と同郷の左慈は、天柱山で貧しい人々を助けていたが、後に南極仙翁に会い、仙人となった。曹操が魏王となった晩年、邸宅と庭園を造るのに人々がこき使われているのを見て、左慈が曹操を諫
	左慈が曹操をからかう一		
	安徽省 亳県		×

	34	左慈が曹操をからかう二	める。聞く耳を持たない曹操に左慈は石を投げると、それは曹操の印璽と瓜二つになった。曹操は怒って捉えようとするが、なぜか誰も近づけず、左慈は去った。曹操が軍を率いて江南へ向かうのを諫めるために、左慈が途上の河で釣りをして待っていた。しかし、諫めても曹操は無視をして南へ向かおうとする。左慈は、地面に一皿の魚と一壺の酒を描くと、それが現実のものとなる。兵士たちが食べても減ることがない。兵士たちが群がり、それに気づいた曹操は左慈を怒鳴るが、左慈はやはり酒を勧める。左慈の仙術を忌々しくも恐れた曹操は斬りかかるが左慈は杯を投げ、鶴になって飛び去る。後の時代の人が、その場所に橋を架け「擲杯橋」と呼び、左慈廟を建てた。	安徽省 廬江	×
	35	曹操の偽墓	漢水が長江に流れ込む場所に平地があり、そこの小山は、曹操の墓と言われているが、実際に曹操は埋葬されていない。その昔、赤壁で負けた曹操は、許昌へ逃げた。しかし、追っ手が迫ると、曹操は各自にそれぞれ逃げろと命令して倒れてしまった。部下たちは、曹操を埋葬して、喪服に着替え、埋葬場所に小山を築いた。それを見た追っ手は追撃を止めた。しかし、埋葬したのは藁人形で、曹操は農民の姿で逃げ落ちた。	不詳	○
	36	曹操が偽りの心で関羽を弔う	呉が関羽を討った後、その首を曹操に送った。曹操は、蜀と呉を相打ちさせるため、関羽を弔った。洛陽南門外に廟を造り、木像を造った。そのことを詰問に来た呉の使者に対して、関羽を祀った場所は、春には川があふれて水に浸かると説明する。すると突然大風が吹き、関羽が墓から現れ、息を吹くと、川の流れが変わってしまった。それ以来、関羽の墓には手をつけなかった。今は周囲に柏が鬱蒼と生え、石碑も多く建てられている。これが関林である。	河南省 洛陽	×
	37	関帝廟の由来	関羽を討った呉は、その首を曹操に送った。曹操は、大声で泣いて、それは本心でもあり芝居でもあった。関羽を討ったのは孫権であることを示すために、曹操は関羽を丁重に弔った。後に曹操は祠を建てようとしたが、諸将が反対するので、私的に故郷の譙郡に廟を建て祀らせた。すると各州府県も廟を建てて、曹操の歓心を得ようとした。清朝になると、多くの山西商人が亳州で商売をして財をなした。彼らは、関羽と同郷で、亳州で足場を固めるために、寄付で大きな関帝廟を	不詳	○

	38	曹操と華佗	建てた。曹操は、ヒ素を盛られることを恐れた。盛られた時に分かるように、ヒ素を一嘗めしたが、このため、頭を痛めてしまった。華佗に助けを求めると、華佗は、頭を開いて薬湯で洗うという。曹操は恐れて、華佗を殺してしまった。すると、華佗が夢枕に立ち、曹操の頭を開き、脳を洗ってまた閉じた。曹操は恢復した。後悔した曹操は、華佗のために祠を造ることにした。しかし、後世の人が華佗を殺した自分を罵ることを恐れ、祠は自分が馬に乗って初めて見える小さいものとした。職人たちは、三つのレンガを「コ」の字に立てて、一つのレンガで蓋をする形の小さい祠を屋根の上に乗せて「廟上廟」と呼んだ。今も亳県の家の屋根にはこれがあり、華佗が祀られている。	安徽省亳県	×
	39	偽墓	曹操が自らの死を覚悟した時、息子たちは外征しており、養子だけが近くにいた。そこで養子に「自分の死後、喪に服さず、赤い服を着て葬ること、葬式の仕方、棺を埋める場所」を指示した。その後、曹丕に手紙を書くと、この世を去った。出棺の日、幾つもの棺が四方八方へ出て、どれが曹操のか分からない。しかも弔旗を持つ者たちは赤い服を着ている。曹丕が曹操から受け取った手紙には、「公務を済ませ、百日後に戻り、赤い服を着ている者は反逆者なので殺せ」とあった。そこで戻ると、養子が赤い服を着ていたので、殺してしまった。曹操の墓の場所を知る者はいなくなり、どこに墓があるか分からなくなった。後の人は、曹操には七二の偽の墓があると言った。	河北省臨漳	×
	40	死んだ曹操が汚職官吏を懲らしめる	天下が乱れて後、数百年、亳州の州官も百回以上替わった。新しい州官の銭佑力は貪欲だった。ある日、崩れた城壁の下に大穴があって、金の臼がある報告が入り、喜んだ。見張りの役人をつけると、その日の夜には見張りを移動させて、身内に持ち去らせた。撫台長官が、これを巻き上げようとするが、銭は承知せず、怒った長官は彼を首にして、二千両の罰金を科した。銭は一文無しになり、金臼のみ手元に残った。しかし、これはその昔、曹操が汚職官吏を懲らしめるために埋めさせた大きな磁石だった。二つの穴にそれぞれ七字が彫られていた。一つには「高い巨人が手を挙げて（高高巨人揚着手）」、そしてもう一つには「木の上の三人を守る（保護樹上人三口）」とある。これを合わせると「操」になる。	安徽省亳県	○

伝承地別に見ると、まずは曹操の故郷がある安徽省は一四話と多い。次いで、洛陽や曹操の本拠地であった許昌がある河南省が九話である。他には、湖北省が四話、河北省が四話、陝西省が二話、湖南省が一話である。やはり、曹操ゆかりの地には、それだけ伝説も多く残されている傾向が窺えよう。

内容面からみると、目立つのは、地名や建造物の由来に関わって伝承されることの多さである。曹操の行いが直接由来に関わっている伝説は一七話（表番号は3・4・9・12・14・15・16・21・24・25・26・29・31・36・37・38・39）である。このうち、36・38・39番を除いて、曹操に対する評価は肯定的である。偉人や英雄の行為が地名由来に結びつくのは、他の多くの伝説においても一般的なので、当然であろう。ここから、この伝説を伝えてきた人々が、曹操に親しみを持っていたことが分かる。

否定的評価の36番は関羽との伝説、38番は、華佗との伝説である。34番の左慈との伝説も地名由来になっているが、こちらも同じく曹操に対しては否定的な評価である。曹操単独の伝説でなく、他の人物との葛藤がある場合、否定的に語られる傾向がある。ただ、39番に関しては、他の登場人物との葛藤がないにも関わらず、曹操の奸智が強調された墓の由来譚となっていて、この表においては例外的である。

他の地名由来となっている話は、曹操を狙う刺客が石像になった10番と、曹操に命じられて武器製造を行った曹丕についての11番、同じく曹操に命じられて視察を行った曹植についての22番である。これらを合わせて二一話が地名や建造物の由来譚であり、全体の半分強である。

そして、他の由来譚としては、植物の由来譚が3番、7番、20番である。そのうち、3番は名産品の大根の由来譚であり、名産品の由来譚としては他に21番がある。また、19番は成語「両面三刀」の由来譚で、28番は農作業に使った重りの鉄の由来譚になっており、これらを含めると、由来を語る内容は、二五話に上る。由来を語るのは、伝説の主要な機能であるので、曹操伝説もその例外ではない。

本稿では『三国外伝』の曹操伝説をまとめたが、この伝説は、前掲の『中国民間故事集成』『中国民間故事全集』を始め、他の資料集にも散見される。今後の課題として、他の資料集にも当たり、曹操伝説の総体を明らかにしていきたい。

三　曹操伝説にみる婚姻儀礼

それでは、前節で確認した伝説において特徴的に現れる民俗、つまり生活文化を分析していく。まずは、表5の話「曹操が袁紹をからかう」の全文を日本語訳して確認する。

曹操が袁紹をからかう（三三八頁～三三九頁）

誰もが曹操と袁紹が宿敵で、最後に曹操が袁紹を滅ぼしたことは知っている。しかし、彼らが若い頃は友人同士であったことは知らないかもしれない。

もともと、袁紹は名門の出身で金持ちのお坊ちゃんで、ずっと身の回りの世話をしてもらっていて、世間知らずだった。曹操といえば、年中各地を渡り歩き、世間を見て、機転も利いて、策略もうまかった。彼は、袁紹など眼中になかった。ある時、袁紹をからかって言った。「兄さん、君の家はうちよりも金持ちだが、君は、俺に届かない」

袁紹は、このことの意味をわからなかった。彼は、曹操を上から下まで細かく見回した。曹操は、背も低くて痩せていて、自分と言えば、背は高く太っていて、威風堂々としている。そこで思わず笑っていった。「弟よ、ちょうど反対だよ。俺はおまえより頭一つ分高いな」

曹操は、心の中で罵った。「積み上げた麦わらは大きいが、牛に食べられてしまう。馬鹿め！」いっそのこと、本音を話そう。「俺が言っているのは、君の知恵が及ばないということさ。信じないかい？俺が、君を騙して売り払っても、きっと君は俺のために金を数えてくれるに違いない」

袁紹は、どうして認めることができようか。そして、その場で勝負することを持ちかけた。この時、ちょうど隣家で婚礼があり、人が行き来して賑やかだった。曹操は、すぐに考えが浮かんで、袁紹に言った。「それなら、賭けるか。これらのことができるのは、どちらだろう。まず、新居の人たちを同時に追い出して、彼らの向きを変えさせて、俺たち二人を追いかけさせる。そして、俺たちはうまく逃げて、最後に皆に何だったかをわからせる。これらのことが、できるか？」

袁紹は、それを聞くと頭を振って言った。「天に昇るより、難しい」

「それなら、俺のやるのを見とけよ。君は、俺の指図に従ってくれ」すると曹操は、すぐに袁紹を連れて、こっそりと隣家の庭に忍び込み、物陰に隠れると、大声で叫んだ。「急いで捕まえろ、賊だ！」

新居の人々は、それを聞いて、賊を捕まえようと一斉に出てきた。曹操は、袁紹を引っ張って、さっと新居の中に入った。見ると花嫁は、一人で震えていた。そこで、刀を抜いて彼女を庭の裏門に追い立てて、ともに出た。

人々は、庭をくまなく探したが、賊が見つからないので騙されたことを知った。そして再び新居に戻るが、花嫁がおらず非常に驚いた。その後、裏庭の門が開かれているのを見ると、蜂が巣から一斉に出るように走り出した。

袁紹は、この大騒ぎを見て、家に入ることはせず、ただ辺鄙な場所を目指して懸命に走っていた。曹操は、当然袁紹が一人で逃げることを許さず、片手でしっかりと掴んで、もう片方の手は、ずっと刀を握り花嫁を脅していた。こんな様子なので、もちろん老牛がボロ車を引くよりも歩きにくく、あっという間に藪の中に迷い込んだ。袁紹は、少しの力もなくなったので、この場所なら見つけられないだろうと、伏せて隠れて朝を待とうとした。しかし、この時、曹操が大声で叫んだ。「早く捕まえろ、賊はここだ！」

袁紹は止まることもできず、最後の力を振り絞って、ついに林を走り抜けた。両脚は既に立つこともできず、地面に座り込んで、息を切らしていた。振り返ると、曹操もついてきて、平然として、大笑いして言った。「花嫁は放したよ。それから、花嫁を探していた人たちには、これは俺たちからの『闇新房（新婚の夜に新居を騒がしてからかう風習）』だと、話したよ。どうだい、この賭けは、俺の勝ちだろう、負けを認めるか？」

袁紹は、やっと夢から覚めたように長いため息をついて言った。「俺は、おまえに届かない、確かに届かないよ」

この話は、文献では、『世説新語』「假譎第二七」に類似の話を確認できる。まずは、新釈漢文大系の『世説新語』[2]から原文と通釈を引用する。作者の劉義慶（四〇四年～四四四年）の南朝・宋時代には知られていたことが分かる。

原文

魏武少時、嘗與袁紹好爲游侠。觀人新婚、因潜入主人園中、夜叫呼云、有偸兒賊。青廬中人皆出觀。魏武乃入、抽

刃劫新婦。與紹還出、失道墜枳棘中、紹不能得動。復大叫云、偸兒在此。紹遑迫自擲出、遂以俱免。

通釈

魏の武帝（曹操）は若いころ、いつも好んで袁紹と遊侠のふるまいをしていた。新婚の人をみかけ、その主人の庭園にそっと忍び込み、夜、大声で「泥棒がいるぞ。」と叫んだ。青廬の中の人々は、皆出てきて様子を見た。その隙に武帝は青廬に入りこみ、刀を抜いて花嫁を掠奪して、袁紹と一緒に逃げ出したが、道に迷っていばらの中に落ち込み、袁紹は身動きがとれなくなった。武帝はまた大声で叫んだ。「泥棒はここにいるぞ。」袁紹はあわてて自力で跳び出し、やっと二人とも助かった。

それでは、口承の伝説と文献の『世説新語』との異同を整理してみたい。

口承	文献
曹操と袁紹は友人同士。	曹操と袁紹はいつも遊侠のふるまいをした。
知恵比べのために、隣家の花嫁をさらう。	新婚を見かけて、花嫁をさらう。（理由は不明確）
騒ぎを起こし、その隙に花嫁を脅す。	騒ぎを起こし、その隙に花嫁を脅す。
曹操、袁紹、花嫁は藪に入り込む。	曹操、袁紹は藪に入り込む。（花嫁については不明確）
動けない袁紹を動かすために、叫ぶ。	動けない袁紹を動かすために、叫ぶ。
曹操は花嫁を解放して、「鬧新房」と言って、家の者を納得させ、袁紹との知恵比べに勝つ。	（花嫁の行方は不明）

どちらも、袁紹を貶めて曹操の知恵を際立たせる手法は同じである。このように話の基本構造は、ほぼ同様であるが、大きく異なるのは口承のみに登場する「鬧新房」である。

「鬧新房」は、嫁入りの際の儀式である。時代、地域により内容の違いがあるが、招待客や友人たちが新郎新婦をからかうことが中心である。しかも、かつては悪ふざけが過ぎる場合が多く、これは近代においても盛んに行われている。例えば、『中国民俗史（民国巻）』[3]の解説を日本語訳して示す。

新郎新婦が新居に入れられた後、「看新婦（新婦を見る）」「鬧新房（新居を騒がす）」の習俗がある。我が国のほとんどの地域で伝わる諺に「新居に老いも若きもない」

というのがある。これは新郎より年上の者が騒ぐ時の口実である。実際、新居で騒ぐのは、青年男女で、特に若い男たちである。それより、年上や年下の者たちは、ただ野次馬をするだけである。新居を騒がす者は、表向きはめでたい祝いの言葉を述べるが、実際は新婦をからかっている。例えば、「新居に入ると明るくて、部屋いっぱいの嫁入り道具を見る。衣装ダンスの鏡はベッドに向けられていて、布団の中の鴛鴦（夫婦）の遊びをはっきりと見せる」など。ある者は、唱えながら手で触れる。例えば「新婦の頭を撫でれば、金銀が家に来る。新婦の手を撫でれば、お金を数える時、全て枡を使う。新婦の肩を撫でれば、子どもを育てたら出世する」など。新婦はどこを撫でられようとも、言い返してはいけない。婚礼の進行係の女性（男の子と女の子の両方がいる女性）でさえ、勝手に追い出すことはできない。民間では、これを「騒がすと金持ちになる」と言うからだ。

「鬧新房」の習俗は、始めから多くのルール違反の行為が混じっている。民間では「三日間、先輩後輩はない」という言い方があり、来賓もマナーにこだわらないで、新郎新婦を好き勝手にからかい楽しみ、新居での騒ぎが行われる。対象は、新婦に限るわけではないが、新婦は紛れもなく主要なからかいのターゲットである。だから、広州などの地域では、はっきりとこれを「反新婦」と言う。この「反」は「玩（もてあそぶ）」と同音なので、「反新婦」は、新婦をからかうことが明らかである。古典でも「鬧房」を「戯婦」と書くことがある。

新居を騒がす悪ふざけは、確かに少なくない。新婚のベッドは、長方形のタンスに似ている。そこで、ある人がこっそりと何枚かのベッドの板を抜いておく。外からは見て分からないので、新郎新婦が休みに入ると、仕掛けが働いて、二人ともベッドの下に落ちてとても驚く。あるいは、いたずらっ子を唆して、先にベッドの下に隠れさせる。新郎新婦がベッドに上がるや、思いきりベッドの板を叩かせて驚かせる。そして、外に隠れていた者たちが押し入る。この時、新郎新婦は笑顔でベッドから起きてもてなさなければならない。更にひどいのは、手のつけられない子どもが干し唐辛子に火をつけて、窓から放り込み、二人を涙とクシャミが出るほどむせさせる。…この類いのことは、数え切れないほどあり、「鬧新房」が原因でトラブルを起こすこともよくある。しかし、ほとんどの新郎新婦

には為すすべがなく、もしくは早くから覚悟している。新郎新婦になった人も、かつてこのように他の人の新居を騒がせたであろうし。

「鬧新房」は、往々にして深夜まで行われる。ひどい時は、朝まで騒ぐ。新郎新婦が疲れ果てるのを見ると、皆はようやく目配せをして、介添えの女性たちと一緒にいく掴みかの祝いの飴を二人の上やベッドに撒く。これを「撒帳子」と言い、そして続々と部屋を出る。その中の一人は、窓から一束の箸を投げ込んで、祝いの言葉を言う。「一つ投げて金、二つ投げて銀、三つ投げて出世する…」これは、韻を踏んで、その声は朗々として、親戚友人の心からの祝福を表している。

以上が、近代における「鬧新房」の一風景である。曹操の伝説にいつから「鬧新房」が語られるようになったかは判然としないが、これを語る人々にとって、「鬧新房」は身近であった。「若者（曹操）が、嫁入りの場で、新婦に対して、無礼を働く」となれば、「鬧新房」が連想されるのは、これを語る者にとっても、聞く者にとっても自然である。しかも、この無礼は、常識外れでも笑って許されるのが習いである。新婦を拉致するような知恵比べの結末にも、まことに都合が良い。口伝えにとって、大切なことは、語る者と聞く者の双方が納得することである。「鬧新房」の民俗が語られることで、この伝説が、自分たちにとって身近なものになったと言えよう。

ちなみに、この「鬧新房」に対しては、次のような民俗学的解釈もある。『中華民俗知識全知道』[4]から日本語訳して紹介する。

「鬧洞房（新居を騒がす）」は、伝統的な婚礼の中で不可欠のしきたりで、婚礼のクライマックスである。各地に「鬧洞房」があり、これは、からかう他にも意義がある。新郎新婦の部屋には、よく狐狸や鬼（き）がいて悪さをするので、鬧洞房は邪霊の陰気を祓い、人の陽気を強めることができる。俗に「人が騒がなければ、鬼が騒ぐ」と言う。「鬧洞房」は、肯定的な意義からでは、賑やかな雰囲気を増して、寂しさを除くので、ある地方では「暖房」とも言われる。古い時代の男女は、人の紹介から夫婦になることが多く、お互いをよく知らない。「鬧洞房」は、この二人の距離を縮めて、結婚生活の良いスタートになる。それ以外にも、「鬧洞房」は親戚友人の互いを親しくさせ、

一族の繁栄を示す働きがある。

このような立場から、曹操の行為を振り返ると、曹操による新婦の連れ去りは紛れもない大騒動である。そして、皆が一斉に、その新婦を取り戻すべく行動したのは、夫婦の絆、親戚友人間の繋がりを強めたことであろう。

では、『世説新語』に記載された話はどのように解釈されているか。例えば、台湾で出された『新譯世説新語』[5]では、次のように解説されている。該当部分を日本語訳して紹介する。

この話は、前半は曹操と袁紹が、道に迷っていばらの道に落ち込むまでの経過が説明されている。後半は、曹操が詐術を用いて袁紹に自力で逃げ出させる経過が描かれている。若いころの曹操と袁紹は、遊侠のふるまいをしていたのに、なぜ新婦を強奪しようとしたのか。おそらく二人は世間知らずで、父母との別れがつらくて泣いている新婦を見て、悪い権力者による略奪婚に遭っていると誤解したのであろう。これを哀れんで、身を挺してまでも救おうとしたのだろう。刀を抜いてまで、新婦を強奪したのに、なぜ曹操と袁紹だけが去ったのか。おそらく、青廬の中で騙されて出て行った人々が戻ってきて、力を合わせて奪い返し、二人を追い出したからだろう。この話は、後半で曹操が騙すことの描写に重点が置かれているので、前半は長くないほうが良い。そこで、省略できるところは省略して、読者の想像に委ねたのだ。

このように、二人が義侠心に駆られて、新婦をさらおうとしたという解釈をしている。ただ、民間の伝説では、このように解釈はしなかった。これでは、曹操までも世間知らずになってしまうので、曹操を主人公とした伝説では納得しがたいのかもしれない。

もちろん、「新婦を刀でおどす」ことから、この話と「鬧新房」を結びつける注釈もある。例えば、『世説新語校釋』[6]では、「抽刃劫新婦」の校釈部分に次のように挙げている。

「看新婦」「戲新婦」は、漢時代からの民間習俗である。例えば、曹操のように新婦を強奪するのは稀だが、常軌を逸した行いはよくある。『意林』四に引く『風俗通』三一には「汝南張妙會杜士、士家娶婦、酒後相戲、張妙縛杜士、捶二十、又懸足指、士遂致死。」とある。また『抱朴

子』外篇・疾謬には「俗間有戯婦之法、於稠宗之中、親屬之前、問以醜言、責以慢對、其爲鄙黷、不可忍論。」とある。

この解釈では、『風俗通』と『抱朴子』を引いて、漢以来の「鬧新房」を紹介している。『風俗通』の作者、応劭は、生没年不詳ながら後漢末の学者である。この記事は、「汝南の張妙が杜士を、婚礼の場で酒を飲んだ後、縛って二十回むち打ち、足をつり下げて、死に至らしめた」とあり、凄惨である。晋の三一七年に完成した『抱朴子』では、実は前掲の校釈での引用部分より、今少し詳しく「鬧新房」を批判している。東洋文庫の『抱朴子　外篇』[7]より、現代語訳を紹介する。

世間に花嫁をなぶる風習がある。公衆の中、親族の前で、卑猥なことを問い、ざれた答えを要求する。その冒瀆ぶりは言うに忍びない。時には鞭打ってころばせ、時には足に縄をかけて逆さ吊りにする。客のなかには酒癖の悪いのもいて、限度を知らず、怪我をさせて血を流し、手足を骨折させる場合すらある。嘆かわしいことだ。

後漢末や晋の時代にこのように記されていることを考えると、『世説新語』の曹操の話が、創作としても、「鬧新房」を念頭に置かれていて不思議ではない。どれだけ知識人が「鬧新房」を批判しようと、この婚姻儀礼は、内容を変えつつも現代まで続いてきた。

四　曹操伝説に組み込まれた諺

曹操伝説のなかには、これを伝える農民の知識が色濃く反映している話もある。まずは、表23「雁門口」の全文を、日本語訳して確認する。

雁門口（三七七頁～三七九頁）

皂市付近に雁門口がある。伝えるところでは、曹操がここを通ったことがあって名付けられた。

その年、赤壁の戦いで、曹操の八三万の軍は、大半が死傷した。生き残った将兵も、ぼろぼろに打ち負かされて、父母がもう二本脚を多く産んでくれなかったことを恨んだ。曹操は、負けたことで軍隊が一気にばらばらになってしまうことを恐れ、気持ちを奮い立たせて、大胆な様子を

装った。そして言った。「幸いなことに周瑜が無能で、伏兵がいない」更に言った。「幸いなことに諸葛亮が役立たずで、険しいところを守るのを知らず、自分の首を絞めた」しかし、結果としてどちらも言い終わるやいなや、手厳しくやられてしまった。特に華容道では、関羽の旧情がなければ、死んでいただろう。将兵たちは、彼の負け惜しみを見て、心の中で嘲って、表情は硬かった。

「龍が浅瀬でエビにからかわれる。虎が浅い川で犬にいじめられる」曹操は、彼らの冷たい表情を見て、忌々しく思った。とにかく将兵を頑張って歩かせ、この窮地から早く脱したいと。

赤壁から離れるにつれ、両側の川や湖も少なくなり、大きな道が現れた。それは、山の入り口まで繋がっていて、将兵たちはまるで船が港に着いたかのように喜んだ。次々と、小さな山の麓に座ると、ほっと一息つき、靴の手入れをしたり、脚を叩いたり、居眠りをするなど、まるでその場に根を張って住み着くようだった。

しかし、ここでぐずぐずするのは、閻魔大王が来るのを待っているのと同じくらい危険であることを、曹操は知っていた。かれは、その小さな山に登ると、将兵たちに早く逃げるように大声で叫んだ。しかし、誰も動こうとはせず、ただ白い眼で見て「敗軍の将が何を語る」と言っているようだった。

すぐに日も暮れて、黒雲が覆い、天地も凍るようになる。こんなにボーッとしていてはいけない。するとある者が、枯れ草を積み、かがり火を点けて、寒さをしのごうとした。曹操は、驚き怒って言った。「追っ手を引き寄せる。死にたいのか」

その言葉が終わらないうちに、かすかに人馬の音が聞こえた。遠くからこちらへ、まっすぐに向かってくる。やはり、追っ手が来た。皆鳥肌が立つほど驚いて、どうしていいか分からなかった。そして、心から曹操に感服した。惨敗したとはいえ、依然として頭脳は明晰であり、判断は神のようだと。そして、異口同音に願って言った。「兵が来たら、将が対抗する。丞相、私たちを率いて戦ってください！」

しかし、曹操は言った。「駄目だ。敵は強く、こちらは弱い。無理に戦うのは、卵を石に打ち付けるようなものだ」

「戦わなければ、逃げよう。丞相の命令をください！」

曹操は、それも退けて言った。「駄目だ！闇夜では、東西南北も分からない。むやみに走れば、敵に向かって飛び込むかもしれない。自ら死ぬようなものだぞ」

「進むことも、退くこともできない。どうしたらいいのか」と皆が途方に暮れた。

曹操は、押し黙って、ただ耳をそばだてていると、ちょうど空を雁の群れが飛んできた。雁たちは、たえず大きな声を出していた。曹操は、突然ひらめくと、思わず大声で笑い始めた。

将兵たちは、訳が分からなくなり言った。「丞相は赤壁から逃げる時に、何度も笑いました。そのたびに、命を失うところでした。今ちょうど危ない時に、なぜまた笑うのですか」

曹操は言った。「雁は冬に北から南へ飛ぶ。私に道を教えてくれたのだ。私たちは、雁が来た方角を目指せば良い。生きて帰れるぞ！」

将兵たちも、急に悟った。曹操は大敗を喫しても、落ち込まず、慌てず、冷静で、偉大であることを。そこで、ますます彼に敬服して、彼に従い北に向かい、ついに、山埡口を越えて、包囲網を突破し、魏国の領土に帰り着いた。そして、雁が道を示してくれたので、人々は、山埡口を雁門口と名付けた。

赤壁で破れた曹操が、雁に助けられて魏国に帰還する伝説である。この最後の曹操の台詞は、実は諺を含んでいる。この伝説の肝である「雁は冬に北から南へ飛ぶ」という箇所である。

そもそも、農民は農作業の目安にするため、鳥の行動に敏感である。渡り鳥の到来は、田植えの目安になり、鳥が飛ぶ高さは天候変化の目安になる。このことについては、拙著『日中民間説話の比較研究』（二〇一三年　汲古書院）の第四章「『小鳥前生譚』の比較研究」で述べているので、本稿では詳述を控え、渡り鳥が農作業の目安になっている例を『中国諺語集成』から二〇ほど示す。

『中国諺語集成　陝西巻』[8]

高山の時鳥が鳴くと春。

雲雀が鳴くのを聞くと、春が来たことを知る。

雁の群れが南へ飛ぶと寒くなり、北へ飛ぶと暖かくなる。

『中国諺語集成　江蘇巻』[9]

燕は清明に来る。
燕が来るのは三月三日を過ぎず、去るのは九月九日を過ぎない。
燕が穀雨より前に来ると、低地は綿を収穫せず、穀雨の後に来ると低地は大豆を植える。
燕が来たらそろって田植えをし、燕が去ったら稲が香る。
燕が来たらニンニクを抜いて、雁が来たら綿花の茎をほじる。
燕は笑いながら来て、雁は泣きながら去る。
燕が来るのが早いと、もみ殻が多くて、食糧が少ない。
雁が来ると雪が舞い、雁が去ると春が来る。
郭公が鳴くと麦が笑い、郭公が鳴くと大忙し（農繁期）が来る。
郭公が鳴くと、怠け妻が驚く。
郭公郭公、麦刈り田植え
郭公が鳴くと、麦が黄色くなる。
『中国諺語集成　上海巻』[10]
雁が北へ飛ぶと暖かくなる。
雁の群れが南へ飛ぶと寒くなり、北へ飛ぶと暖かくなる。
雁が南へ渡らなければ寒くなく、北へ渡らなければ暖かくない。
雁が南へ飛ぶと、霜近し。
雁が去って一八日すると霜あり。
燕が来るのが遅いと、雨が多い。

つまり、雁が冬に北から南へ飛ぶことは、農民にとって常識である。これを曹操が知っていたからといって、特に曹操の博識ぶりがアピールされるわけでもない。ここで大切なことは、自分たちが知っている知識が、曹操の危機を救い、この知識をきっかけに再び曹操が部下たちの信頼を取り戻すことである。口承の話は、伝える人と聞く人の共感の上に成り立っている。であれば、このように農民たちにとって既知の知識が話の大切な鍵となる場合、そこに共感も生まれやすい。こうして、既に共有されている民俗的な知識が、話に組み込まれると、その話の伝承される力を増すことができる。

これまで見てきたように、口承の曹操伝説は、史実や『三国志演義』から独立して伝承される上で、地名や建造物の由来、物産の由来、民俗的な知識を取り込み、民衆の間で楽しまれて

きたことが分かる。

注

（1）稲田浩二・大島建彦・川端豊彦・福田晃・三原幸久編『日本昔話事典』（一九七七年　弘文堂）の「伝説」の項目。項目の執筆は福田晃氏。（六一八頁）

（2）目加田誠『世説新語』下　新釈漢文大系第七八巻（一九七八年　明治書院）（一〇七四頁）

（3）鍾敬文主編・万建中等著『中国民俗史（民国巻）』（二〇〇八年　人民出版社）（二八四頁～二八五頁）

（4）雅瑟・陳艶軍編著『中華民俗知識全知道』（二〇一〇年　企業管理出版社）（三四一頁）

（5）劉正浩・邱燮友・陳滿銘・許錟輝・黄俊郎『新譯世説新語』（一九九六年　三民書局）（七八一頁～七八二頁）

（6）龔斌校釋『世説新語校釋』（二〇一一年　上海古籍出版社）（一六四一頁～一六四二頁）

（7）本田濟訳注『抱朴子　外篇一』東洋文庫五二五（一九九〇年　平凡社）（二三五頁～二三六頁）

（8）中国民間文学集成陝西巻編輯委員会編『中国諺語集成　陝西巻』（二〇〇〇年　中国ISBN中心）

（9）中国民間文学集成江蘇巻編輯委員会編『中国諺語集成　江蘇巻』（一九九八年　中国ISBN中心）

（10）中国民間文学集成上海巻編輯委員会編『中国諺語集成　上海巻』（一九九九年　中国ISBN中心）